

好感度が上がらない

登場人物
紹介

ベルモンテ夫妻

リッカとジルトの両親。

アリオ

シュブル学園に通う、
女子生徒に人気の王子様。

マイセン

王都の城下町で
リッカが出会った青年。

モモカ

シュブル学園に
転校してきた美少女。
ちょっと不思議な行動を
取っていて……？

ジルト

孤児院で育った少年。
ある雪の日に、
リッカの義弟となる。
いつも仏頂面だが、
心根は優しい。

リッカ

乙女ゲームの世界に
転生した少女。
義弟の好感度を上げるべく、
日々奔走中!

目次

好感度が上がらない

7

小さな手のぬくもり

237

そんなあなたの幸せを

267

好感度が上がらない

1 マイナスからの好感度

私が『この世界』に違和感を覚えた最初の日。それは、警戒心と不信感を瞳に宿したやせっぽちの少年——私の「義弟」となるジルトと出会った、冬の日のことだった。

私は、それなりに裕福な商人の一人娘として生まれた。十歳のある日まで、自分の生活について不思議に思うことなく、普通に暮らしていた。その日も、夕方まではいつもと変わらない一日だったのだが——

ガラランガララン。

「あ！」

一階にある広間の大きなテーブルの上で宿題をしていた私は、玄関の扉についた鐘の音を聞いて、勢いよく立ち上がった。父が帰ってきたようだ。

「お帰り、お父さん！」

いつものように父を出迎えようとしたのだが、私は広間の扉を開けた瞬間、思わず立ち止まってしまった。

玄関扉の前には、父が所在なさげに口髭を撫でながら立っていた。朝に着ていた黒くて暖かそうなコートは着ておらず、厚手のスーツに包まれた体を少し震わせている。そんな父の後ろには、小さな男の子がいた。私と視線が合った瞬間にうつむいた彼の顔を、金色の髪が隠す。

見たことのない男の子だけど……誰だろうか？

私と同じく父を出迎えにきた母も、その少年の姿を見て目を丸くしている。

「……あなた？」

いつもはとてもおっとりしている母だが、笑みを浮かべて「……浮気相手との子供を連れてきた、なんてことでしたら、覚悟してくださいね」と宣告した。

父は「とんでもない！」と青ざめている。

「その通りを、とぼとぼ歩いていった。孤児院から逃げ出したみたいんだけど、こんな寒い中、薄着だと死んでしまうと思って……」

父の説明を聞いた母は、「まあ」と口元に手を当てて、少年を見た。

彼は六歳くらいだろうか。薄い長袖のシャツに長スポン、靴も靴下も履いておらず、髪の毛は凍りついたようにカチカチになっていた。その小さな肩には父の黒い毛皮のコートがかけられていたが、真っ青な少年の顔を見るに、彼の体を温めるには足りないようだ。

私の住んでいる街リルボンは、とても寒い地方にある。この国で一番さかえている王都レハールからは少ししか離れていないが、王都とは違って一年中雪が降っている。ここには人の手が入っていない森林が多く、人口もあまり多くない。雪がたくさん降るため生活にはちょっと不便だが、治

安は良いほうだ。だから、外で暮らしている家のない子供なんて、まずいいない。きつと父は彼に同情して、我が家に誘ったのだろう。

少年は私たちの様子をうかがいながら、玄関扉との距離をちらちら測っていた。黒く薄汚れた彼の顔には、警戒心と不信感、そして恐怖が張りついている。おそらく彼は、私たちが彼を叩き出し、孤児院に送り返すのではないかと緊張しているのだろう。何かあれば、すぐに逃げられるように構えている。

私は思わず彼に声をかけた。

「寒くない？」

彼はビクリと肩を震わせて、こちらを見た。

私と目が合うと、彼の綺麗な青い瞳は怯えたように揺れる。私は広間の扉を後ろ手でそっと閉め、彼に尋ねた。

「手と足が真っ赤だよ。お風呂に入る？」

私の言葉に、彼は自分の手を見て唇を噛みしめた。けれど、それ以上動こうとも返事をしようともしない。

ピンと張りつめた雰囲気の中、優しい声が降ってきた。

「ああ、そうね。リツカ」

母はいつものおっとりとした笑みを浮かべて、私に言う。

「お風呂場まで案内してあげなさい」

「はい」

私はパタパタとスリッパを鳴らしながら、玄関脇の暖炉の前を通って、彼のもとへ駆け寄った。少年は戸惑ったように視線をさまよわせ、少し後ろに下がる。

彼は、私と玄関扉を何度か交互に見た。

——逃げようか、どうしよう。

そんな彼の心情が伝わってきた気がして、私は彼の前に立つと、にっこり笑いかけた。そうして彼に手を伸ばす。

「行こう、ほら」

私が掴んだ彼の手は、氷のように冷たかった。

「……っ！」

次の瞬間、小さく息を呑んだ彼は私の手を振り払った。じり、と後ずさりして私を見る。

彼の顔が今にも泣き出しそうなくらい歪んでいた。悪いことでもしてしまったのかと、私は少々たじろいだ。

「大丈夫だから、行っておいで」

父はしゃがみこむと、少年の背中をぼんと押した。彼はそれだけで、ふらりと前に倒れこむようにたたらを踏んだ。長袖からのぞく彼の手首はとても細く、手も小さく見えた。私はもう一度、彼に手を伸ばす。

「行こう？」

二度目は振り払われなかった。彼の冷たい手は私の手の体温を奪っていき、雪に触れた時のように、私の手も冷たくなった。

私は彼の手を引っぱって、風呂場へと向かう。

そこそこ裕福な我が家は、部屋の数も割と多い。玄関と風呂場の間には、部屋が六室ある。二部屋を通り過ぎたところで、私は冷たくなった右手を離して、改めて左手で彼の手を握った。

「……っ」

私の右手が離れた瞬間、彼は少しだけ体を震わせた。

「あ、ごめんね。大丈夫？」

返事はなかったが、彼の左手はさすがのように私の手をぎゅっと握った。

私が彼を風呂場に案内してすぐに、救急箱を手にした母と使用人がやってきた。雪のように冷えた彼の両手はしもやけになっているかもしれないし、どこか怪我をしているかもしれない。

「凍傷とちじょうになっていたら大変だいじょうだよ」

母は心配そうに言う少年を促うながして、使用人とともに風呂場に入っていった。

私は無事に役目を終えた気分、広間の大きなテーブルに戻った。学校から出された宿題の続きをやるうと思っただが、そわそわとして落ち着かない。あの少年が気になって仕方がなかった。

心まで凍りついたような彼の目が、頭から離れない。

どれくらい、そうしていただろうか。椅子に座ったまま、気もそぞろに宿題を見つめていると、

広間の扉が開いた。

「リック」

「お母さん」

彼の様子を聞こうと、私は母に駆け寄る。すると、母はいつもの優しい笑顔で私に囁ささやいた。

「あの子は、やっぱり手足が凍傷とちじょうになりかけていたわ。葉を塗ぬって、今は部屋にいるんだけど、温かいスープを運んであげてくれる？」

「うん、いいよ。ねえ、お母さん。あの子、なんて名前？」

母は少しだけ困った顔をして、首を横に振った。

「……一言も話してくれないのよ」

私は、ぱちぱちと目を瞬またかせた。……一言も？

そんな私を優しく抱きしめて、母は微笑ほほえむ。

「リック、弟欲しい？」

「へ？ え？ うん？」

よく意味がわからず首をかしげながら言うと、母は納得したようにうなずいた。

「いいわ。ちよつとお父さんと話してくるから、あなたはスープをお願いね」

「うん、わかった」

母からの問いかけの意味を考えながら、私はうなずいた。弟……弟？ 確かに、兄弟は欲しい。近所には同じ年頃の子供がおらず、遊び相手がいなかった。学校までは馬車で三十分もかかる。

一人っ子の私にとって、年が近い遊び相手はとても魅力的だった。

厨房にいた使用人から温かいスープを受け取って、さっそく彼のもとに行こうとした時、はたと気がついた。

……部屋の場所を聞き忘れた。どこに運ばばいいんだろう。

彼がどの部屋にいるかわからなかった私は、とりあえず一階にある部屋の扉を順番に開けていった。三部屋目の扉を開け、「ここも真つ暗だな」と回れ右しようとした時、何やら人の気配を感じた。

中をのぞいて目をこらすと、部屋の隅で少年がうずくまっていた。

燭台の蝋燭が消えてしまったのだろうか。私は廊下から差しこむ明かりを頼りに、テーブルにスープを載せた。そして廊下に置かれていた燭台を手取る。

テーブルの上、部屋の隅にある燭台に、次々と火を灯していく。すると、部屋が明るくなった。

比較的小さめのこの部屋には、ベッドに本棚、机、テーブルと椅子などの家具が置かれている。

普段は使われていないのだが、使用人たちがいつも綺麗に掃除している。広間からほど近い部屋だ。少年は膝を抱えて座ったまま、身動きひとつしない。

「スープ、持ってきたよ。飲まない？」

そう声をかけても、彼は頭を膝に載せ、ぐるぐる包帯が巻かれた手でぎゅっと自分の腕を掴んでいた。

うーん、と人差し指で頬をかこうとした瞬間。

目の前にぼんつと何かが飛び出してきた。

【名前】

ジルト (男性)

【好感度】

- 30

【年齢】

9歳

【身長】

115cm

【備考】

幼い頃、アクセリ孤児院にあずけられた少年。

【好きな食べ物】

かぼちゃ、キノコ

【嫌いな食べ物】

にんじん

【弱点】

犬

……!?

いきなり現れたその画面に、私は固まった。

何、これ？

ジルトって!?

混乱して、画面をじっと見つめる。何度瞬きをして、それは消えない。

しばらくして、私は思った。

——あれ、これ何かのゲーム画面みたい、と。

そう思った瞬間、「ゲームって何？」と混乱する自分と、「ああ、確かにゲームみたいね」と納得する自分の両方がいることに気がつく。

そして思い出した。私は以前、妹がプレイしていたこのゲーム画面を、ちらりと目にしたことがあったのだ。

私、リッカ・ベルモンテには、もちろん妹なんていない。けれど、かつての私……おちあいらりか落合梨花には妹がいたのだった。

前世の私は、1LDKのマンションの小さな部屋で妹と二人暮らしをしていた。

妹の名前は落合桃。もも年は私よりひとつ下で、高校一年生だ。

ある日の夜、ココアでも飲もうとキッチンに行くと、妹が何やらゴソゴソやっていた。どうやらゲームソフトの包装をはがしているところらしい。

そのパッケージをちらりと見て、私は呆れた声を出した。

「……また新しいゲーム、買ったの？」

私の言葉に、桃はにんまり笑って見せた。

「えっへへ。お姉ねえもやる？ 最近、人気のゲームなんだよ」

「いい。私は落物派だから」

私はさくつと断った。

落物物というのは、ゲームのジャンルのひとつ。上から落ちてくるブロックを積み重ね、色をそろえるなどして、ブロックを消していくゲームだ。

ちなみに私は、ぶにぶにしたスライムモンスターが落ちてくるゲームが大好きである。

ブロックを積み上げて一気に消す快感を、桃にも味わってほしい。しかし彼女は、いつも途中でゲームコントローラーを放り投げる。細かい作業が苦手な妹なのだ。とりあえず、コントローラーが壊れるから投げるのはやめなさい。

包装をはがし終えた桃はリビングに向かい、ソファに横になって、さっそく新しいゲームをプレイしました。そして携帯ゲーム機の小さな画面を見て笑う。

「誰から落とそうか迷っちゃうなあ」

ぶにぶにしたやつを落として消せばいいのに、と私は思う。

彼女は鼻歌まじりに、ゲーム機のボタンを押している。後ろからそつとのぞきこむと、高校生くらいの男の子のイラストと名前、その他いろいろな情報が載っているキャラクター画面が目に入った。

妹の好むゲームはやったことがないので、どういうものか具体的にはわからない。けれど、知らなくても私の人生には関係ないと思っていた。……思っていたのだ、その時は。

私の目の前に現れた画面は、あの時に見たものと、とても似ている気がする。

前世の私——落合梨花がその後どうなったのかは覚えていない。覚えていないが、私はいつの

間にかリッカ・ベルモンテとして存在していた。
ゲームの画面が見える、この世界に。

どうということなのだろう。前世の常識ではありえないし、私の今までの常識でもありえないが、この世界ではポップアップ画面が現れるのが普通なのだろうか。そんな風に思いながら指を下げると、ポップアップ画面が消える。その間ずっと、男の子は部屋の隅で膝を抱えたまま、こちらを見もしなかった。

私は少年を置いて、慌てて部屋を走り出た。
広間に行くと、父と母が真剣な顔で何か話しこんでいたので、二人の目の前で人差し指を立ててみる。

「……？」

両親は、不思議そうな表情を浮かべて私を見つめている。私の目の前には、何も出てこなかった。私は少年のいた部屋に駆け戻り、勢いよく扉を開けると、再び彼の前で人差し指を立てた。

【名前】
ジルト (男性)
【好感度】
- 30
【年齢】
9 歳
【身長】
115cm
【備考】
幼い頃、アクセリ孤児院 にあずけられた少年。
【好きな食べ物】
かぼちゃ、キノコ
【嫌いな食べ物】
にんじん
【弱点】
犬

やはり、先ほどと同じ画面が現れた。
どうということなのかと、私は頭を抱える。名前の欄にジルトとあるが、これは目の前にいる少年の名前なのだろうか。

少年は部屋に戻ってきた私を一瞥して、また顔を伏せた。

私は扉をばたんと閉めると、彼に尋ねた。

「ねえ、名前なんて言うの!？」

「……」

少年は顔を膝に埋めたまま、動かない。とりあえず名乗ってほしい。目の前の画面が正しいなら、

もしや……

私はさすがのように少年の前まで行って、頼みこんだ。

「お願いだから、私を助けると思ってた名前を言って」

私の表情に、鬼気迫るものを感じたのだろうか。彼は眉根を寄せると、かすれた声で呟いた。

「……ジルト」

……なんてことだ。画面を消すように指を下ろして、私はがっくりとうなだれた。そして、この世界の人はポップアップ画面を見られるのが普通なのではないか、という唯一の望みを込めて聞いてみる。

「……ジルト、目の前にポップアップ画面が出たことある？」

こいつは何を言っているんだ、という彼の視線が私に突き刺さっている気がした。

* * *

その日、私の家に家族が増えた。弟のジルトである。

ちなみに、口を開こうとしない彼からどうやって名前を聞き出したのかと母に尋ねられたので、「泣き落とし」と答えた。ある意味、事実である。ちよつと泣きたくなった。

それにしても、あのポップアップ画面はなんなのだろう。

画面には、【好きな食べ物】がかぼちゃと書かれていた。ジルトがやってきた翌日の晩、母にか

ぼちやグラタンを作ってもらったところ、前日のスープは残していたのにグラタンは完食した。

画面の情報によると、彼は九歳である。孤児院からジルトを正式に引き取る際、職員より彼の年齢が九歳だと伝えられた。両親はもつと幼いと思っていたらしく、驚いていた。

あの画面には、どうも正しい情報が書かれているようである。

とはいえ、こんな話をしたらおかしな人に見られてしまいそうで、誰にも相談できずにいる。

また、画面上の【好感度】という項目。好感度マイナス30は伊達じゃない。

マイナスって……むしろ嫌われ度30としたほうが良いのではないかと思う。

名前を尋ねて以降、彼は私の問いかけや誘いに返答することが一切なかった。果てしなく嫌われている。

彼は私たちと話そうとせず、警戒したように部屋にこもっていた。引きこもりである。

私——落合梨花ことリツカは、前世の記憶が蘇えった最初こそ混乱したものの、今は前世と今世の自分が融合したような形で落ち着いた。前より少しお転婆になったと言われるが、それも弟ができたからだろうと両親は納得している。

半信半疑ではあるものの、どうやらここはゲームの世界らしい。

どういうゲームなのか正確にはわからないが、ポップアップ画面に【レベル】という項目がないので、ロールプレイングゲームではないだろう。空からぶにぶにした物体が落ちてくる気配もないので、私の大好きな落ち物ゲームでないことも確かだ。ちっ。

妹が好んでプレイしていたのは、乙女ゲームというものだ。しかし残念ながら、私はちらりと画

面を見たり、妹の話を軽く聞いたりする程度だったので、よくわからない。もしかしてジルトは、そのゲームに出てくるキャラクターなのだろうか。

彼は、我が家に来て二週間経った現在も、部屋に引きこもっている。

外に小雪のぼらつく夜。私は食事を持って彼の部屋に入った。

「ジルト。今日の夕飯は、ジルトの好きなかぼちゃの煮物とキノコご飯だよ？」

満面の笑みで、彼に声をかける。

ごく、と唾を呑む音が聞こえたが、彼はかたくなだった。睨みつけるように鋭い視線を私に向けて後、ふいっと顔を逸らす。

やれやれ、と私は机に食事を置いた。私がいると食事に手をつけないので、彼が温かいうちに食べられるように、部屋から出なくてははいけない。野生の獣を飼慣らそうとしているかのようである。

部屋から出ないジルトに、着替えや風呂用のタオルを運ぶのは使用人だったが、食事は私が運んでいる。両親に志願したのだ。

母は「弟ができて嬉しいのね」と言っていたが、そうではない。いや、確かにそれもあるけれど。

——好感度マイナスは、さすがに嫌だ。

一ミリも好かれていない、むしろ嫌われまくりだなんて家族として悲しすぎる。今後、姉弟として仲良くしていきたい。せめて好きでも嫌いでもない程度まで好感度が上がってほしい。

最初は部屋の隅から一步も動かなかったジルトだが、現在はそこから三歩くらい手前の位置で膝

を抱えている。千里の道も一步からだ。

「にんじんは入ってないよ。食べるよね？」

そう尋ねてみるが、相変わらず膝を抱えたジルトは返事をしない。

私は人差し指を立てる。

【名前】	ジルト・ベルモンテ (男性)
【好感度】	- 29
【年齢】	9 歳
【身長】	115cm
【備考】	幼い頃、アクセリ孤児院にあずけられた少年。その後ベルモンテ家に引き取られて養子となった。
【好きな食べ物】	かぼちゃ、キノコ
【嫌いな食べ物】	にんじん
【弱点】	犬

ポップアップ画面に燦然と輝くマイナス29。好感度1上がりました。やったね。

……なぜだろう、千里どころじゃなく長い道が見えた気がする。

初日に名前を言ってから一言も喋らないジルトであったが、両親はそんな彼の態度をおおらかに受け止めていた。

彼は孤児院でひどい扱いをされていたのだと、母に聞いた。だからこんなに細くて小さく、そして警戒心が強いのだと。

「いっぱい食べて、もっと太ったほうがいいよ」

彼の身長は私より低く、おそらく体重だって私より少ない。……けっして、私が太っているというわけではない。そう主張したくなるのは、前世の記憶のせいかな。食べるとすぐ太ってしまう私は、高校時代、ダイエットがお友達だったのだ。

でも目の前の彼には、もっとたくさん食べて、ふくふくしてほしい。長袖からのぞく細い手首を見て、切に思う。

「温かいうちに、食べてね」

そう言うって部屋から出ようとした時、背中に彼の視線を感じた。

* * *

その半月後。やっと彼が口を開いた。

「……りがと」

いつものように夕食を彼の部屋に置いて一方的に話しかけ、さて帰ろうと彼に背を向けた瞬間、後ろから蚊の鳴くような声が聞こえたのだ。

何事かと振り向いたが、彼はそっぽを向いている。

私が目を丸くしていると、前よりも警戒心が緩んだのか、ジルトは椅子に座って食事に手を伸ばした。

素知らぬふりをする彼に、私は満面の笑みを浮かべた。
そして人差し指を一本立てる。

【名前】	ジルト・ベルモンテ (男性)
【好感度】	- 27
【年齢】	9 歳
【身長】	116cm
【備考】	幼い頃、アクセリ孤児院にあずけられた少年。その後ベルモンテ家に引き取られて養子となった。
【好きな食べ物】	かぼちゃ、キノコ じゃがいも
【嫌いな食べ物】	にんじん
【弱点】	犬

うん、最初に比べて好感度が3上がったし……

じゃがいもを好きになったのは、この間の夕飯で出たジャーマンポテトがきつかけかな……。おかわりしてたし。良いことだよ、うん。

私は自分にそう言い聞かせ、この先の長い長い道なりに思いを馳せつつ、部屋を出たのであった。

さらに二ヶ月ほど経った頃。雪のやんだ静かな夜、廊下の窓からは月明かりが差しこんでいた。私はいつものようにジルトの部屋に向かう。

私が彼の部屋の机に食事を置くと、彼は小さな声で私に話しかけてきた。

「……リッカ」

私は目を丸くした。

「ジルト？」

お互い名前を呼んだきり、私たちの間に沈黙が落ちた。

引きこもりの息子が部屋から出てきたかのような感動を覚え、私は彼に笑いかけた。

「ジルト、広間で一緒に夕飯を食べる？」

彼はしばらくためらった後、小さくうなずいた。

引きこもりの彼が社会復帰の第一歩を踏み出したことへの安心感に、私は思わず頬を緩めた。

ついでに人差し指を立ててみる。

【名前】	ジルト・ベルモンテ (男性)
【好感度】	- 26
【年齢】	9歳
【身長】	118cm
【備考】	幼い頃、アクセリ孤児院にあずけられた少年。その後ベルモンテ家に引き取られて養子となった。
【好きな食べ物】	かぼちゃ、キノコ じゃがいも
【嫌いな食べ物】	にんじん
【弱点】	犬

マイナス26……

……上がり方が地味すぎる気がしてならないが、とりあえず好感度は1上がった。身長が伸びているのも、いいことである。

栄養豊富な食事のおかげか、最近のジルトは普通の子供の体つきに近づいてきた。以前より頬がふつくとして肌の色も明るくなり、細すぎた腕には少しずつ肉がついてきている。

何気なく彼の顔を見つめる。可愛らしい顔立ちだけど、ちよつと尖った雰囲気だ。前世でちらりと見たゲーム画面の男性の顔はうる覚えだが、ジルトの雰囲気とは違う人だったような……。いや、ジルトが子供だからそう感じるのだろうか。

人差し指を立てたまま彼の顔を見つめ続けていると、ジルトが怪訝けげんそうな表情を浮かべた。

「ああ、ごめん。行こうか、ジルト」

私はそう言って手を差し出したが、ジルトは手を出そうとしない。ただ黙って私が動くのを待っている。

差し出してしまった手が所在なくて恥はずかしい。私はしょんぼりしながら手を引っこめると、ジルトの部屋の扉を開いた。

マイナスの壁は厚い。「仲良し」どころか、「普通」までの道のりが長すぎて泣けてくる。

窓から廊下に差しこんだ月の明かりに、ジルトは眩ましそうに目を細めて部屋を出た。

それ以降、彼はよく喋しゃべるようになった。

私だけではなく両親とも話すようになり、孤児院にいた頃には行っていなかった学校にも、翌年度から入学する予定だ。

予習のためにと私の教科書や本を貸したら、スポンジが水を吸うように、彼はぐんぐん知識を吸収し……実に生意気な口をきくようになった。

警戒心と厭世えんせい観かんがそうさせるのか、彼はぶつきらぼうで乱暴な物言いをする。可愛い弟を夢見ていた私は、正直なところかなりショックだった。

「リツカの書いてる答え……だいたい間違ってるな」

彼は広間のソファに座り、私が前年度に使っていた教科書を見ながらつつこんできた。失礼で

ある。

時と場合によっては、大人げなく胸ぐらを掴み、ぐらんぐらん揺らしてやろうかと思う。

「ジルト、リツカじゃなくてお姉ちゃんって呼びなさいよ」

「……」

ふん、と彼はそっぽを向いた。

ああ、うん。もちろん現在も、好感度はマイナスである。悲しくなんかないやい。

前年度といえは、私は九歳。日本だと小学三年生だ。自分はこの世界に転生したのだと気がついていなかったし、前世のことだっと思って思い出していなかった。記憶があれば、間違えなかったかもしれない。

——とはいえ前世について思い出した現在、私は天才はおろか秀才にもなれなかった。なぜなら、習う学問が日本とはかなり違うのだ。この世界の共通言語であるシュバル語はなんとか習得したものの、いまだに文字を書くのはへたくそである。おそらく、日本の小学生がひらがなを練習しているようなものだろう。

ちなみに私は今、宿題で出された刺繡ししゅうを黙々と進めている。この世界にも、家庭科の科目があるのだ。

刺繡なんかできなくても死なないのに、と嘆なげきながらやっているせいか、うっかり針を指に刺してしまい、白いハンカチがところどころ赤く染まっている。大丈夫、まだ予備のハンカチはたくさんある。

三度目に指を針で刺した時、ジルトは呆れたような顔で言った。

「そんな不器用な人を姉とか呼びたくねえよ」

「うっさいわ」

ジルトの言葉に、ぴしやりと言う。

時々「優しい姉」の仮面が外れている気もするが、気のせいであってほしい。こういうやりとりができるのは、ジルトがこの家に慣れてきた証拠だと思いたい。だんだん遠慮のなくなってきた私たちは、姉弟らしく見えることだろう。……多分。

私は針を刺してしまった左手の人差し指を舐めると、ハンカチを放り投げた。

「ちよつと休憩してくる」

「手、ちゃんと消毒してこいよ。刺し傷だらけとか情けねえ」

「はいはい」

一応心配してくれているのだろうか。私は右手の人差し指を立てた。

【名前】
ジルト・ベルモンテ (男性)
【好感度】
- 22
【年齢】
9歳
【身長】
120cm
【備考】
幼い頃、アクセリ孤児院 にあずけられた少年。 その後ベルモンテ家に引き 取られて養子となった。 地方の学校に通う予定。
【好きな食べ物】
かぼちゃ、キノコ、 じゃがいも
【嫌いな食べ物】
にんじん
【弱点】
犬

……マイナスの好感度から脱却できそうにない。これでも仲良くなったのだろうか。じつとジルトを見つめると、彼は顔をしかめた。

「なんだよ、早く行け」

そう言っつて、しっしつと手を払うジルト。嫌われている気しかない。

私が手を消毒して、お菓子をつまみながら休憩という名の長い現実逃避をした後。

左手への指刺し作業、もとい宿題を再開すべく広間に戻ると、先ほどテーブルに放り投げた血痕つきのハンカチが消えていた。かわりに置かれていたのは、半分ほど花が刺繍された真っ白いハンカチ。先ほど私が作業していたところまで刺繍されている。



「ジルト、何かした？」

「別に」

彼はそっぽを向いたまま教科書を読んでいる。

ハンカチをまじまじと眺めたが、どう見ても私がやった刺繍ではない。

私が刺繍した花は隙間がだいぶあいていて、縫い目もバラバラだった。しかし、こちらの花は縫い目が等間隔にそろっている。

「この刺繍……かなり几帳面きちょうめんというか神経質な感じ」

「……」

彼はムツとした顔で私が手にしていた刺繍入りのハンカチを奪うと、点々と血のついたハンカチを私の頭めがけて投げつけた。な、なんだなんだ、決闘の合図か？ いや、あれは白い手袋を投げるんだっけ。

「俺、部屋に戻るからっ」

怒った様子のジルトは、教科書を持ったまま広間から出ていってしまった。残された私は血痕けっこんつきの刺繍ハンカチを頭から下ろし、ぱちくりと目を瞬かせたのであった。

ジルトと一緒に学校に通うようになり、半年以上が過ぎた。彼が我が家にやってきて、もう一年以上が経つ。私は十一歳、彼は十歳になっていた。相変わらず私には毛を逆立たせた猫のような態度を取るが、それでも地道に好感度は上がっていき、今ではこんな感じだ。

【名前】
ジルト・ベルモンテ (男性)
【好感度】
- 10
【年齢】
10 歳
【身長】
130cm
【備考】
幼い頃、アクセリ孤児院 にあずけられた少年。 その後ベルモンテ家に引き 取られて養子となった。 ミレ学校初等部。
【好きな食べ物】
かぼちゃ、キノコ、 じゃがいも、トマト
【嫌いな食べ物】
にんじん
【弱点】
犬

彼は、地味に好きな野菜を増やしていると思う。

そして好感度マイナス10をお祝いしたい。もう少しでマイナス一桁だ。これを祝える私のいじらしさを褒めてほしい。

「ジルト、帰りにケーキを買って帰りたいんだけど」

ある朝、学校に向かう馬車の中で、私は向かい側に座るジルトに声をかけた。

私たちは毎日一緒に、家の馬車で送迎をもらっているのだ。よって帰りに寄り道をする場合、当然彼も巻きこむことになる。

ジルトは眉根を寄せた。

「太るんじゃないの」

「あなたには、キャロットケーキを買ってきてあげる」

「……」

彼の眉間の皺が深くなった。しかし、彼は負けず嫌いだ。特に、こういう時には確実に言い返してくる。

「別に、俺はにんじん嫌いじゃねえし。好きにしるよ」

最近、姉弟喧嘩をよくするようになった。ジルトが気を許してきたからだろうか。前世で高校生だった私としては、弟に優しく譲る気は満々である。しかし、かつて妹がつかかかってきた時と同じように、つい条件反射でつつこんでしまう。いかんいかん。

窓の外を眺めながらむくれている弟を見て、私は少し反省した。大人気ないことをすべきではない。私も元は高校生。頭脳は大人……とまでは言えないが、一応姉なのだから。

「嘘よ、カボチャプリンでいい？」

「……」

私の言葉に、彼はふんつとそっぽを向いた。

その日の放課後、私はケーキ屋さんの前で馬車から降りた。さく、と雪を踏みしめる音が足元から響く。コートの中で首をすくめて、私は白い息を吐いた。寒い。この地域は、冬の気候が年中続くのだ。暖炉よりもこたつが欲しい。まあさすがに、この世界にこたつはないけれど。

雪が降り積もる西洋風の建物には、シユバル語で「ケーキ」と書かれた看板がかかっている。ミキサーなど便利な道具のない中で、生地を膨らませたりクリームを泡立てたりするのは大変そうだ。すべて手作業だろうか。この世界には魔法もないようなので、気になるところである。いつか私も手作りしてみたい。

「ではお嬢さま、お坊ちやま。馬車は邪魔になりますので、周囲をぐるりと回って、またお迎えにまいります」

使用人の御者はべこりと頭を下げて、馬車を移動させる。ケーキ屋さんは、あまり広くない道に面していた。駐車場……ならぬ馬車置き場は、街の中心地にはあるものの、この近くにはない。

私は隣に立っている人物に向かって尋ねた。

「ジルトは、なんで一緒に来たの？」

私と一緒に馬車を降りたジルトは、嫌そうな顔をした。

「うっさいな。リツカに変なものを買われたら、たまらないからな」

そんなおかしなものを買うつもりはなかったのだが、全然信用がないらしい。失礼な話である。もし妙なケーキがあったら買ってやろうと思いつつ、私はお店の扉を開ける。ドアベルがカランカランと可愛らしい音を立てた。少し遅れてジルトもついてくる。

「いらっしやいませ」

優しそうな笑みを浮かべた店員さんが声をかけてきた。

こぢんまりとした店内には私とジルトしかいないので、ゆっくり選べそうだ。

店の奥にはテーブル席がふたつあり、入り口からほど近い場所に置かれたシヨーケースには、ケーキがたくさん並んでいる。シヨーケースは、水で冷やしているらしい。

私は色とりどりのケーキをじつと見た。どのケーキも、私を誘惑する。

ああ……チーズケーキもいいし、ショートケーキもいいなあ。でも、やっぱり桃ムースかな。

「美味しそう……」

ケースをのぞきながら、思わず声が漏れた。ついでに涎も垂れそうだ。すると、呆れたような声が聞こえてきた。

「そんなアホ面してたら営業妨害だろ」

「……」

私はケースの端に置かれた、あるものに目をやった。そして、すっと目を細める。

『手作りケーキセットで、あなたもケーキを作ってみよう』だって、ジルト」

「……」

私の言葉に、彼は体を震わせた。私は店員さんに向かって、笑顔で手を上げる。

「すみませーん、手作りっ……むぐっ」

「桃ムースとカボチャプリンをひとつずつ！」

横から私の口を押さえて、ジルトは勝手に注文した。まだ一度もお菓子作りの腕前を披露したことはないというのに、なんて反応だ。

「はい、ありがとうございます」

店員さんはここにこしながら、桃ムースとカボチャプリンを手早く箱に詰めて差し出してきた。ジルトの手はすぐに離れたものの、ここで訂正をするのも申しわけなく、私は箱をそのまま受け取った。

代金を払い終えた私はジルトを睨んだが、彼はどこ吹く風である。生意気そうな口元は楽しげに上がっている。くっ、覚えてる。

「ありがとうございます」

店内に食べられるスペースはあったが、馬車を待たせるのも悪いので、私たちは家でケーキを食べることにした。ケーキ屋さんの扉を開くと、入った時と同じようにベルがカランカランと鳴る。外に出て左右を見回したが、まだ馬車は戻ってきていなかった。

私は、ジルトに話しかける。

「だけど、よくわかったわね、ジルト。私が選ぼうと思ったケーキ」

「リツカの思考は単純だから……」

また生意気なことを言いかけたジルトが急に固まった。その視線の先には、一匹の中型犬がいる。野良犬だろうか。耳の立った真っ黒い犬が、道の向こう側をうろろしている。

その時、私は思い出した。ジルトの弱点。

そういえば、犬が苦手なんだった。ふとジルトを見ると、彼は唇を震わせて立ち尽くしていた。顔が真っ青である。

私はまた左右を見回す。けれど、馬車はまだ来ない。

「ジルト、ケーキ屋さんに戻ろうか」

「……」

私が声をかけても、彼は体を硬くして身動きひとつしなかった。動いたら襲われるとも思っているのだろうか。その瞳は、怯えたように揺れている。彼の腕を引っ張ろうとしたが、最近背が伸びて大きくなったジルトを、私の力では動かすことができなかった。

「……っ」

彼の喉の奥から、息を呑むような音が漏れた。犬が私たちを見つけて、こちらにまっすぐ向かってきたのだ。その尻尾は左右に揺れているので、襲いかかろうとしているようには見えないが……

「——い、やだっ」

後ずさりしたジルトは、足を滑らせて転んでしまった。地面に尻もちをついた状態で、引きつった表情を浮かべている。そんなジルトに気づかない犬は、たったたつと軽快にこちらへ寄ってくる。

彼の怯え方は、ただごとではない。私は彼と犬の間に立ちふさがって、ぱつと手を広げた。その時、雪上に何か落ちたような音がかすかに聞こえた。

「やめ——ろっ、リツカ！」

後ろから悲鳴が聞こえた。

向かってくる犬は、血に飢えた野獣という様子ではない。むしろ人懐こそうだ。しかしジルトの視界から犬を追いやらねばと、ただそれだけを考えて、私は近寄ってくる犬に手を振った。

「駄目よ、あっち行つて！」

犬のスピードは見る間に落ちた。歓迎されていないことに気づいたのだろうか。残念そうに尻尾を下げて、私たちを避けるように、すつと脇道に入ってしまった。

ジルトの前に立った私は、犬が完全に視界から消えたのを確認し、戻ってこないか脇道をのぞきにいこうとした。

すると後ろからコートを掴まれて、歩きかけた私はその場で盛大に滑った。

べしやっつ。

舗装された地面に積もった雪は固かった。ぶつけてしまったお尻が痛い。しかも今日のコート、

新品なのがいいい！

雪にまみれた私は文句を言おうと振り返ったが、後ろでコートの端を握りしめる彼の姿を見て言葉を失った。

ジルトは、真っ青な顔をして震えている。そして私のコートをきつく握りしめる手は、真っ白だった。まるで、私が先ほどの犬に今にも食い殺されるのではないかと怯えているようだ。

「……ジルト？」

「だ、駄目だ……リツカ」

「……？」

いつも生意気なことばかり言うその口を震わせて、彼はかすれた声を出した。

「か、噛まれたら、どうする……行くなよっ」

「……」

彼の目には、あの犬が猛獣のように映ったのだろうか。弱点に犬と書いてあったが、本当に苦手みたいだ。私は黙ってジルトのそばに寄った。

「うん、行かないよ」

「ば、馬鹿じゃねーの……リツカは、本当に」

「……」

友好的に近寄ってきた犬から弟を庇ったら、その弟に罵られた。なんてことだ。

ジルトはようやく私のコートから手を離すと、青ざめた顔を膝に埋めた。

「怖かった……」

何がそんなに彼を怯えさせたのだろうかと思議に思い、私は震えているジルトの頭をそつと撫でた。しかし、彼はその手を払いのけた。

「……俺を庇うとか、二度とすんなっ」

散々である。あんな弟を見て庇わない姉がいるだろうか。少なくとも私には無理だ。

私はジルトの隣に座ると、同じように膝を抱えた。彼の頭にはうっすらと雪が積もっている。その雪を払ってあげたかったが、また怒りそうなので、動かすのは口だけにした。

「何回でも庇うよ、これでもお姉ちゃんだし」

「……」

私の言葉に、彼は顔を伏せたまま返事をしない。

それから、馬車が戻ってくるまで彼は一言も話さなかった。

コートのを雪を払って馬車に乗り込み、私たちは家に帰った。その後、ぬくぬくした広間で、ジルトを庇った時にひっくり返ったケーキの箱を開ける。ごめん、カボチャプリンと桃ムース。美味しういただくので許してください。

無言のまま、一度逆さまになったケーキをつつく私たち。……気まずい。

黙々とカボチャプリンを食べていたジルトは、ぼつりと言った。

「リッカ」

「……そろそろリッカお姉ちゃんとか呼んだらどうかかな、ジルト」

たまには主張してもいいのではないかと思つて、私は控えめに言ってみる。

義理とはいえ弟なのに、私のことを呼び捨てにするのはどうだろう。まあ、本音としては、久しぶりにお姉ちゃんと呼ばれてみたかったのだ。前世の妹であった桃のように「お姉」と言われるのもいいけど、こちらは絶対無理な気がする。

「……今日はごめん、リッカ」

当然のように、ジルトは私の言葉をスルーした。ガン無視とはどういうことだ、この野郎。しかし今日の出来事を思い返すと、彼の胸ぐらを掴んで無理やりお姉ちゃんと呼ばせるのはあまりに外道だと思つたので、私はただ彼の言葉に答えた。

「ううん」

弱点とは書かれていたが、あそこまで犬が嫌いだとは思わなかった。嫌いというより……あれは、恐怖や怯えというものだ。

「前……に、いたところで」

ぼつり、と彼は呟いた。

「……黒い犬に、襲われたことがあって」

それ以上言葉を紡ぐのをやめて、彼はカボチャプリンを再び食べはじめた。

私は、「彼は孤児院でひどい扱いを受けていた」という母の言葉を思い出した。辛い思いをしたんだらうと、私はそれ以上何も聞かなかった。

「ケーキ、美味しいね」

私が彼に笑いかけると、ジルトも少しだけ笑った。目をわずかに細め、口の端を上げたその表情

は、ささやかながらもはじめて見た、彼の優しい笑顔だった。思わず私も笑みを深くしたが――
「……リツカじゃない人が作ったケーキだからな」

その言葉を聞き、今度はあの手作りケーキセットを買おうと決心した私だった。

ケーキ屋に行った日から早くも半年以上が過ぎ、ジルトはますます生意気になった。さらにはすくすく成長して、いつの間にか身長がかなり近づいてきた。抜かされては姉の威厳が保てない、と危機感を覚える。

そしてなぜかジルトは、学校で女の子に大人気だった。あんなに無愛想だというのに、こういうことなのか。顔か。顔なのか。

初等部では、確かにジルトほど整った顔立ちの少年はいない。それに、彼は勉強も運動もできる。うん、生意気な弟ながら、誇らしい。

だがしかし、ひとつだけ問題がある。

【名前】
ジルト・ベルモンテ (男性)
【好感度】
0
【年齢】
11 歳
【身長】
140cm
【備考】
幼い頃、アクセリ孤児院にあずけられた少年。その後ベルモンテ家に引き取られて養子となった。ミレ学校初等部。
【好きな食べ物】
かぼちゃ、キノコ、じゃがいも、トマト
【嫌いな食べ物】
にんじん
【弱点】
犬

めでたく好感度0。マイナス脱却、万歳。

しかしこれは半年以上、ずっとこうなのである。

ジルトを犬から庇ったあの日以来、彼の好感度は0でびったり止まり、上がることはなかった。誕生日プレゼントをあげようが家族で旅行に行こうが、何をしても上がらない。

話しかければ嫌そうに顔を背けるし、遊びに誘っても基本的に拒否される。手作りケーキを作ってみた日には、この外道がという目で睨まれる始末だ。ひどい。さらにその後、厨房の使用人「お嬢さまは立ち入り禁止」という札を立てられる不可思議な事件が発生した。なぜだ。

好感度マイナスから脱却すれば「普通の姉弟」になれると思っていたが、これはどうも違うので

はないだろうか。

ジルトの好感度0というのは、まだ「嫌い」の状態なのかとがっくり肩を落とした。

ジルトと「普通の姉弟」になるには、どうしたらよいものか。

そんなことを考えつつ、私は学校の教室の窓から校庭を眺めていた。ここ最近では雪が降っていないため、校庭で授業を受けている生徒たちの姿が見える。私も今は歴史学の授業中なのだが、先生の声があまり頭に入っていない。

校庭では、ジルトのクラスの男子が剣術訓練をしていた。私の教室は二階で、席は窓際。そのため、外の様子がよく見える。彼らは、これから二人一組で打ち合いの練習をするらしい。この寒いによくやるものだ。

級友と剣を打ち鳴らすジルトの姿も見える。ジルトの剣技は、攻撃的ながらも荒っぽくはなく流麗だ。その顔には、うっすらと笑みが浮かんでいる。

そういえば先日、ジルトが模擬戦と呼ばれるもので一位をとったと先生から聞いた。しかし、当たり前のように私には教えてくれない。何かあれば喜々として家で報告する私とは大違いだ。

「仲良し姉弟つものに、憧れているんだけどなあ」

少し寂しい気持ちで彼を見つめていると、ふっと顔を上げたジルトがこちらを見た。ぱっちり目が合う。

彼は顔をしかめるようにして、しっしと手を払った。多分見るな、という意味だ。ふん、私に見

られることすら嫌なのか。
やさぐれた私は舌を出した後、思い切り手を振ってあげた。頑張れジルト、といった意味を込めて。

彼は焦ったような様子で、「いいから手を振るのをやめる」的なジェスチャーをしてくる。知らん。姉に応援される恥ずかしさを味わうがいい。

彼を無視して手を振り続けていると、後ろから教科書でぽんと頭を叩かれた。

「リッカ。そんなに授業より弟が好きなら、外で走ってくるか？」

「……」

ロボットのようになぎぎと私が振り向くと、そこには先生が笑顔で立っていた。すっかり忘れていたが、今は歴史学の授業中であつた。

もちろん外より室内が好きな私は、平謝りした。

「すすす、すいません！ 授業が好きです先生！」

「じゃあ次の体育の準備運動で、リッカには一周多く走ってもらうからな」

「……」

のおおおお。頭をかかえて机につっぱず瞬間、視界の端に呆れたような顔のジルトが映った気がした。

その日の夕方。案の定、家に帰る馬車の中で「リッカの馬鹿っぷりがすごく恥ずかしかった」とジルトから真顔で言われた。その時の私の気持ちは察していただきたい。

ジルトが我が家に来てから、もうすぐ三年になる。

彼はあと少しで十二歳。私はすでに十三歳で、中等部だ。

初等部と中等部に分かれたのだが、私たちの通っている学校は、どちらも同じ敷地内にある。よって今まで通り一緒に馬車で通っていた。とはいえ、校庭などですれ違ってもぶいと顔を背けられる。好感度0は伊達じゃないね！

「お母さん、ジルトの誕生日プレゼント、何にするの？」

自室で編みものをしていた母の膝に顎を載せて見上げると、母はおっとりとお微笑んだ。

「そうねえ……リツカには今年ポニーをあげたし、おそろいでもう一匹飼う？」

「……うーん」

去年の誕生日、プレゼントは何が欲しいか聞かれて、私は五色のクッションがたくさん欲しいとねだってみた。理由？ うん、ぶにぶにしたやつが落ちるゲームへの禁断症状である。

希望の品がプレゼントされると、私はさっそく自室でそれを積み上げてみた。もちろんゲームとは違い、そろえても消えないので、配置をいろいろ変えて楽しむ。わーい。

そんなふうで遊んでいた私に、ノックもなしに部屋に入ってきたジルトはどん引きした。「……

何やってんだ？」という彼の言葉に、私は笑ってごまかすしかなかった。姉の威厳が失われてしまいうような気がする。……そもそも、そんなものがあつたかどうかについては考えたくないで、考えないことにしよう。

そんなわけで、今年の私の誕生日プレゼントは母にお任せした。すると先月、新しいコートと茶色のポニーがプレゼントされたのだ。

小さなポニーはすぐ可愛かった。一瞬、前世で好きだった敵役ゲームキャラから取ってサタンと名づけようかと思つたのだが、倒されたら困るのでベルにした。首元につけられた、綺麗な音のする鈴が由来だ。裏庭の近くに雪の対策をした小屋と、柵で囲った小さな馬場を作ってもらったため、時間がある時にはベルに会いに行っている。

しかしジルトが、ポニーを喜ぶかというと……

私は首をかしげて、母に言った。

「ジルトはあんまり動物好きじゃないみたいよ、お母さん」

プレゼントされて以来、私はベルに乗ったり餌をあげたりと可愛がっていたが、ジルトは積極的に近づこうとはしなかった。犬と違って他の動物には拒絶反応を示すことがないが、好んで触れあおうとはしないようだ。

「そうなのよね。でもまあ、リツカとおそろいなら、それはそれで喜ぶと思うんだけど」

そう言って微笑む母は、話をしながらも魔法のように編み目を紡ぎ、どんどんマフラーが長くなつていった。母は編みものも料理も刺繍も得意なので、すごく羨ましい。

「私も編みものしようかなあ。あ、ジルトのプレゼントにどうかかな？」

「……まあ、編みものは心がこもっていけば……ええと、その」

一生懸命フオローの言葉を探している母の愛に、涙を禁じ得ない。お母さん、さりげなく全否定だよな、それ。まあ、去年のジルトの誕生日、刺繍したハンカチをプレゼントして「呪いのハンカチか」と呟かれた時よりはマシか。針が三回しか指に刺さっていない、一番うまくできたものを渡したというのに失礼な話である。

いつそ本人に聞いてみよう、私は立ち上がってそのままジルトの部屋に行き、「誕生日プレゼント、編みものと料理と刺繍のどれがいい？」と尋ねた。するとジルトは真顔で、「リツカが祝ってくれるなら、気持ちだけで充分だ。具体的に言うとも何も作るな」と答えた。

「気持ちだけで充分」というのはとてもいい言葉だと思うのだが、なんとなく釈然としなかった。よってプレゼントにはマフラーを編もうと思う。喜びの涙を流すがいい。

* * *

ジルトの誕生日を数日後に控えた、ある日。マフラーの毛糸がなくなってしまったため、使用人にお願いで馬車を出してもらい、街に向かった。ジルトには内緒のサプライズプレゼントのため、もちろん一人である。

街の一角に馬車を停めてもらい、買ひもの用のバスケットを片手に、お小遣いを握りしめて手芸

屋さんに入る。店内には様々な毛糸や刺繍糸、レースやファーなどの小物が並んでいた。柵一面に並ぶそれらは、見ているだけでウキウキする。

あまり大きくない手芸屋さんなので、すぐに目的の毛糸が見つかった。とその時、足元にファーが落ちていたのに気がついた。真っ白でもこの毛皮なのに、汚れてしまうではないか。落とししたのは誰だ、まったく。

そのもこもこを掴んだ瞬間、もこもこが私の手をすり抜けた。

「……え？」

ファーが動いた。思わず後ずさると、そのファーがぐるりと振り向く。

「……犬？」

毛の塊のようなそれは、まん丸の黒い目を私に向けた。毛玉かと思うほど、ふわふわもこもこの白い毛で覆われた子犬。ポメラニアンによく似ていた。ちんまりとした耳に黒い鼻、小さく開いた口はまるで笑っているかのようだ。きらきら輝く目が私を見上げる。

「ファー」

大きな欠伸をした子犬に、私は精神攻撃をくらった。息も絶え絶えに、胸を押さえる。

え、何これ、可愛すぎるんだけど……触っていいの？ 撫でていいの？

抱きしめて転がりたいくらいの可愛らしさである。

私が興奮に震える手で抱き上げると、子犬は短い尻尾をぱたぱたと振って、私のコートの胸元についたボンボンを甘噛みした。ああ、誕生日にもらった新品のコートなのに！ でも許す、可愛い

から！

「あの、この子はお店で飼っている犬ですか？」

手芸屋の店員さんに尋ねると、優しくそうなおばさんは目を丸くした。

「あれ……いいや、どうしたんだい、その子？」

「この床に丸まっていたんです」

「あらまあ」

店員のおばさんは首をかしげた。そして、私が抱きかかえている子犬をまじまじと見る。

「うちの子でもないし、その子を飼ってる人も知らないねえ。まだ子犬のようだし、首輪もないから、野良なんじゃないかい？」

そう言われて子犬を見ると、確かに首輪をしていない。野良なのだろうか。

しかし、ふわふわの毛は触り心地がよく、私のコートを甘噛みしながら、うとうとと眠りかけている姿から、野良にしては人懐こい気もする。可愛い。

野良ならば、いつそ飼いたい。飼いたいけど――

私は首を振った。飼いたいけど、駄目だ。

うちにはジルトがいる。こんなに小さくても、苦手な可能性が高い。以前、黒い犬を前にした時のような、ジルトのあんな姿はもう見たくない。

「この子、おばさんのおうちで飼うことはできますか？」

店員さんに聞いてみたが、彼女は首を横に振った。

「悪いね。うちにはすでに犬がいるから、これ以上は飼えないんだよ」

「そうですか……」

そんなことを話しているうちに、子犬はすっかり眠りについてしまった。捨て置くわけにもいかず、店員さんには「飼い主がもし来たら、教えてください」とうちの連絡先を伝え、私は毛糸の入ったバスケットと毛玉のような犬を抱えて手芸屋を出た。

手芸屋の周囲の家を何軒か回って尋ねてみたが、誰も知らず、見たこともないらしい。いよいよ野良か捨て犬かという線が濃厚になった。

日はすっかり暮れ、これ以上遅くなると両親とジルトの雷が落ちてくる気がしたので、私は途方に暮れながらも馬車に戻った。御者に謝って馬車に乗ると、膝の上の毛玉――いや、子犬が身動きした。

「フアア……」

大きな欠伸をして、子犬はもう一度私の膝の上で丸くなった。どうしようと思う私にかまわず、馬車はスピードを上げて家路を急ぎ、数十分ほどで我が家に到着した。

私は毛玉のような犬をバスケットに入れ、その上に毛糸を載せた。そして、こそごと玄関の扉を開ける。そこには、立ちはだかる第一関門……いや、腕組みをして不機嫌そうに立つジルトがいた。私は思わずバスケットを後ろに隠す。

「遅い！ こんな時間まで何やってたんだよ、リッカー！」

「え、ご、ごめん。ジルト」